Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-17

『大鏡』「日本紀聞くと思すばかりぞかし」考 : 日本紀講筵と歴史語り（小特集 歴史物語研究の可能性）

桜井, 宏徳

(Citation)
國文論叢,54:16-25

(Issue Date)
2019-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012107

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012107

【小特集】歷史物語研究の可能性

『大鏡』「日本紀聞くと思すばかりぞかし」考

――日本紀講筵と歷史語り――

桜井宏徳

一　「日本紀聞くと思すばかりぞかし」再考

『大鏡』「六十八代　後一条院」の章段は、語りの現在時における今上である後一条天皇については、道長とその子らによる「御うしろみ」（「六十八代　後一条院」五七頁）[1]の盤石さを謳うのみで多くを語らず、その後は、藤原摂関家の歴史を天皇家とのミウチ関係を軸に語ってゆくという歴史語りの企図を世次と重木との対話を通じてあらためて明示すること、次いで、大臣なるものの由来と沿革について世次に語らせることに力点を置いている。この天皇章段（帝紀）から大臣章段（列伝）への橋渡しの部分は、「大臣序説」（『日本古典文学大系』『大鏡全評釈』）「天皇紀余談」（『日本古典文学全集』）「帝紀から列伝へ」（『新編日本古典文学全集』）などとさまざまに称されているが、ここで世次は、聴衆に次のように語りかけている。

A世次、「よしなき事よりは、まめやかなる事を申はてん。よく〳〵たれも〳〵きこしめせ。けふの講師の説法は、菩提のためとおぼし、おきながらがとく事をば、日本紀きくとおぼすばかりぞかし」といへば、僧俗、「げに、説経・説法おほくうけたまはれど、かくめづらしき事のたまふ人は、さらにおはせぬなり」とて、年おひたるあまほうしども、ひたいにてをあてゝ、信をなしつゝきゝゐたり。

（「六十八代　後一条院」五九～六〇頁）

ここでは、世次がみずからの歴史語りを、もとより半ば冗談ではあろうけれども、「けふの講師の説法」と対比しつつ、「日本紀」に擬していることが何よりも注目されよう。近く『新編日本古典文学全集』が、

世次の〝日本紀〟は、講師の〝説法〟というもどきがなされ、その延長線上に、聴衆も額に手をあて拝む。なお、世次に自分の歴史語りを正史「日本紀」にたとえさせたところに、作者の並々ならぬ自信のほどがうかがえる。[2]

と述べているように、ここで世次は「もどき」を装いながらも、己の語りを「日本紀」と比肩しうるものとまで言挙げし、強烈な自負を示しているのである。

また、夙に五十嵐力氏、次いで松本治久氏が示唆していたよう

に、[3] Aの傍線部の世次のことば「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」は、『源氏物語』「蛍」巻の物語論における光源氏の、

Bこちなくもきこえおとしてけるかな。神よゝり世にあることをしるしをきけるなゝり。日本記などはたゞかたそばぞかし。これらにこそみち〳〵しくはしき事はあらめ。

（「蛍」二―四三八～九頁）[4]

という発言、とりわけ傍線部「日本記などはたゞかたそばぞかし」を強く意識し、それに対するアンチテーゼとして発せられているものと推察される。AとBとの関わりについての先行研究としては、五十嵐・松本両氏の論稿のほかには、石川徹氏校注の『新潮日本古典集成』が「『大鏡』の作者は螢巻を読んでいたのであろうか」と言及しているのが管見に入った程度であるが、[5] 作り物語である『源氏物語』が「日本記（紀）」を「かたそば」と評しているのに対して、歴史物語である『大鏡』はそうした見方を排し、むしろ歴史の中にこそ「みち〳〵しくはしき事」を見出そうとしているのだ、とする松本氏の論旨は説得力に富む。

本稿は、Aをめぐる右のような注釈史・研究史の蓄積を踏まえながら、従来は等閑に付されてきた「日本紀きく」という表現への着目を糸口として、世次の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」ということばの意味するところについて、より深く考察を加え、かつは新見を提示しようとするものである。

二　「日本紀」を「聞く」ということ

はじめに、前掲Aにおいて世次のいう「日本紀」とは何を指しているのか、その意味を確認しておきたい。この「日本紀」について、現行の『大鏡』の主要な注釈書のほとんどは、「国の正史の意味で六国史すべてを指す」（『新編日本古典文学全集』）「『六国史』すなわち日本の正しい歴史」（『新潮日本古典集成』）「官撰の正史をひろく指すとみる方がよい」（『大鏡全評釈』）などとして六国史の意で解しているが、[6] 近年、「日本紀」という語が六国史を指していると認められる確実な例は十一世紀にはいまだ見出せないことが梅村玲美氏によって報告されており、[7] これを承けて、六国史の意とするのがほぼ定説化していた『源氏物語』『紫式部日記』の「日本紀」の用例についても、『日本書紀』のみを指すものとして徐々に解釈が改められつつある。[8]『源氏物語』『紫式部日記』よりは半世紀以上後れるものの、『大鏡』もまた十一世紀の成立と目されるテクストであり、[9]『大鏡』の「日本紀」の用例についても、やはり『日本書紀』の意と見ておくのが妥当であろう。

従って、ここで世次は、自身の歴史語りを六国史ではなく、『日本書紀』になぞらえていることになり、「日本紀きく」も「『日本書紀』を聞く」の意となるが、いささか疑問に思われるのは、はたして『日本書紀』は「聞く」ものであったのか、ということである。『日本書紀』のごとき大部な、しかも漢文の歴史叙述が音読され、それを「聞く」という営みは、いかにも想像しにくかろう。むしろ『日本書紀』は、「見る」――黙読することにこそ適したテクストであったのではあるまいか。[10]

ごく常識的に考えれば右のようにも思われようが、しかし、『日本書紀』には確かに「聞く」といわれるにふさわしい場が存在していた。「平安時代に宮廷の公的行事として行われた『日本

書紀』講究の集会[11]」である日本紀講筵がそれである。そこでは、本文が朗読されたわけではないが、『日本書紀』をいかに訓むべきか、という訓読の問題を最大の論点として、「多数の公卿・官人が出席して、博士の講説を中心に活潑な討議が行われ[12]」ていた。日本紀講筵は、まさに「日本紀」を「きく」という営みが行われる場としてあったのである。

日本紀講筵じたいは、『大鏡』の語りの現在時である万寿二年（一〇二五）を遡ること六十年、村上天皇の康保二年（九六五）を最後に途絶えているが、貞観十八年（八七六）生まれの世次は、元慶・延喜・承平・康保と四度の日本紀講筵が行われた時代を生きており、そのありさまをつぶさに伝え聞いてもいたであろう。その世次のいう「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」とは、日本紀講筵を多分に意識し、「おきならがとく事」に、日本紀講筵を聴講するつもりで耳を傾けてほしい、と戯れながらも自負を込めて聴衆に呼びかけることばであったものと思しい。

それでは、「おきならがとく事」――世次の歴史語りを日本紀講筵になぞらえるという『大鏡』の警抜な発想は、何に由来しているのであろうか。むろん『大鏡』の独創であったと考えることも可能ではあるが、前述のように、『大鏡』の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」は、『源氏物語』の「日本記などはたゞかたそばぞかし」に対するアンチテーゼとしてあるものとみられ、『源氏物語』との関わりがまずは留意されよう。とはいえ、「日本記などはたゞかたそばぞかし」という光源氏のことばには、『大鏡』の「日本紀きく」という表現を直接に導き出す要素は見られず、世次の語りを「日本紀」に擬する、という発想を促しはしても、日本紀講筵を想起させるまでには至らなかったのではないかと思量される[13]。

ここで注目されるのが、『紫式部日記』における「この人は日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」（一三四頁）[14]という、よく知られた一条天皇のことばである。従来の『大鏡』研究では、世次の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」ということばを考えるに際して、『紫式部日記』が参照されたことはなかったようであるが、私見によれば、『大鏡』の「日本紀きく」という日本紀講筵を念頭に置いた表現は、前掲Bの『源氏物語』の光源氏のことばよりも、むしろこの『紫式部日記』の一条天皇の発言に多くを負っているのではないかと推定される。以下では、『紫式部日記』の「この人は日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」から『大鏡』の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」への道筋について、やや詳しく見てゆくことにしたい。

三　『紫式部日記』から『大鏡』へ
――日本紀講筵をめぐって――

『大鏡』における世次の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」ということばと、『紫式部日記』に記された一条天皇の「この人は日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」という紫式部評との関わりを考えるに先立って、『紫式部日記』の当該箇所を以下に引き、問題の「この人は日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」をどのように解するのか、『紫式部日記』研究の最新の成果をも踏まえつつ、本稿の立場を明らかにしておく。

Cさいものないしといふ人侍り。あやしう、すゞろによからず

思ひけるも、えしり侍らぬ心うきしりうごとの、おほうきこえ侍し。うちのうへの、『源じの物がたり』人によませ給つゝきこしめしけるに、「この人は日本紀をこそよみたまふべけれ。まことにざえあるべし」とのたまはせけるを、ふとをしはかりに、「いみじうなんざえがある」と、殿上人などにいひちらして、「日本紀の御つぼね」とぞつけたりける、いとをかしくぞはべる。このふるさとの女のまへにてだにつゝみ侍ものを、さる所にてざへさかしゐではべらんよ。

（一三四～五頁）

傍線部をめぐっては、「よみたまへけれ」という黒川本の表記を不審として、あるいは『花鳥余情』所引の本文「みたるへけれ」を参考とし、あるいは近世の足立稲直『紫式部日記解』・清水宣昭『紫式部日記釈』などの校訂本文に従って、「読みたるべけれ」とするのが近年まで一般的であり、『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』『新潮日本古典集成』など、現行の主要な注釈書の多くも「読みたるべけれ」と校訂している。

これに対して、工藤重矩氏は、『紫式部日記』の注釈史を丹念に辿りながら、黒川本の「たまへけれ」は、本来「給ふへけれ」とあったものが、「ふ」を表記しない「給へけれ」の形となり、次いで「給」が仮名表記されて「たまへけれ」となったものであることを、『源氏物語』の写本の例を挙げて論証し、しばしば不審とされてきた一条天皇から紫式部への敬語「給ふ」についても、上位者から下位者への敬語がありうることを、日本語学の成果を援用して詳述している。[15] さらに工藤氏は、藤井高尚『日本紀の御局の考』以来、読書の意とする説が根強かった「読む」の解釈をめぐっても、『続日本後紀』『日本三代実録』『貞信公記』などの例を根拠として「講義する」の意と解しうることを説き、「日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」という表現と日本紀講筵との関連を先駆的に指摘した石川徹氏の所説[16]を再評価して、「この人は、日本紀をこそ講義なさるべきだ」という現代語訳を提示する。

また、山本淳子氏は、この工藤氏説を支持しつつ敷衍して、一条天皇のことばを「（女性だから有り得ないことではあるが）この人は日本書紀の講義をして下さらなくてはな」という紫式部の学才に対する感嘆を込めた冗談であると解し、「日本紀の御局」という綽名も「日本紀を講書の会で読む、すなわち講師役を務める女房」の意であるとする。[17]

工藤・山本両氏の論は間然するところがなく、本稿もこれに従って以下の論を進めてゆくことにしたい。これまでの通説的な解釈とは大きく異なることになるが、Cの傍線部を私にことばを補いながら逐語訳しておけば、「この人（＝紫式部）は『日本書紀』をこそ（ぜひとも）講義なさらなくてはならない」とでもなろうか。

前掲Cの『紫式部日記』では、紫式部が一条天皇によって日本紀講筵の博士に擬されていたが、『日本書紀』の講義または講読は、「よみたま（ふ）べけれ」とあるように、「読む」という語によって表される。この「読む」が、前掲Aの『大鏡』の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」の「聞く」と対を成す語であることは論を俟たないであろう。日本紀講筵には、『日本書紀』を「読む」者と、その講説を「聞く」者とがあり、聴衆に「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」と呼びかける世次は、本文に直接「読

む」の語こそ現れないものの、Cにおける紫式部と同様に、「日本紀をこそよみたま（ふ）べ」き立場に位置づけられるのである。「日本紀の御つぼね」に倣っていえば、「おきならがとく事をば、日本紀きくとおぼすばかりぞかし」という世次は、「日本紀の翁」と自称しているに等しいのだといえよう。

みずからを日本紀講筵の博士になぞらえるほどの自負を示して憚らない世次に対し、Cの紫式部は、左衛門の内侍によって揶揄的に付けられた「日本紀の御つぼね」という綽名に不快感を隠さず、「いとをかしくぞはべる」――笑止千万であるとして一蹴しているが、近時、吉井美弥子氏は、迷惑げな素振りを見せながらも、「日本紀の御つぼね」という綽名をあえて記しとどめているところに、この「父兄や夫の官職とは関わらない、いわば本人自身の「個性」によった「名前」」に対する、紫式部の「自負とさえいえるかもしれない思い」を看取しており、[18] 首肯される。表向きの態度こそ世次とは対照的であるが、紫式部もまた、「この人は日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」という一条天皇の激賞と、それに由来する「日本紀の御つぼね」という綽名とに、世次に勝るとも劣らない自負をひそかに抱いていた、と見ることも可能であろう。

叙上のように、『大鏡』の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」と『紫式部日記』の「日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」とは、「聞く」と「読む」との照応に加えて、『日本書紀』を「読む」役割を担う人物を日本紀講筵の博士に擬している点でも共通している。加えて、「日本紀」なる語は平安時代の仮名散文テクストには現れにくく、前掲のA・B・C以外には用例を見出しがたい。『紫式部日記』も、周知のごとく『栄花物語』に引用されるなど、広く流布していたようであり、『大鏡』にとってもけっして参照しがたいテクストではなかったものと推察される。こうした点から推せば、『大鏡』の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」が、『紫式部日記』の「日本紀をこそよみたま（ふ）べけれ」に着想を得ている蓋然性は、相当程度に高いのではなかろうか。日本紀とその講筵をめぐる平安仮名散文文学の言説史の中に、『紫式部日記』から『大鏡』への回路が存するであろうことを、ここでは想定しておきたい。

紫式部が女性であるがゆえに、それにふさわしい学才を備えながら務めえなかった日本紀講筵の博士を、あくまでも「もどき」――パロディ[19]の位相においてではあるが、世次は務めようとみずから名乗り出ているのである。かつて藤井貞和氏は、「モノガタリは正統的な言語的伝承に対してパロディ的位置にあろう」と述べていたが、[20] 非正統的な言語的伝承たるモノガタリの系譜に属する『大鏡』は、日本紀講筵という正統な営みのパロディとして、世次の歴史語りを位置づけようとしていたものと思しい。

四　〈問〉と〈答〉
――日本紀講筵と『大鏡』の歴史語り――

最後に、世次の歴史語りを日本紀講筵になぞらえることが『大鏡』にとってどのような意味を持っているのかについて、若干の考察を加えておきたい。前掲Aの「けふの講師の説法は、菩提のためとおぼし、おきならがとく事をば、日本紀きくとおぼすばかりぞかし」という世次のことばが、「講師の説法」と「日本紀」

とを引き合いに出すことによって、自身の語りを二重に権威づけようとする意図のもとに発せられていることは容易に読み取れよう。だが、世次の語りが当然のごとく日本紀講筵そのものではありえないことは、聴衆はもとより、世次自身とて承知の上であり、その限りでは、世次のことばは戯れ言の域を出ていない。

それでは、日本紀講筵に擬するという、いささか大仰にも思われる仕掛けは、世次の歴史語りをそのパロディとして位置づける以上の意味を『大鏡』にもたらしていないのであろうか。そうではあるまい。ここでは、日本紀講筵が、講師を務める博士らの講説を単に列席者が聴講するだけの場ではなく、以下に見るように、博士らと列席者との間で盛んに〈問〉と〈答〉とが交わされる討議の場であった、という事実に着目したい。

D問。諸史伝経藉等。只注二第一第二一。不レ加二巻字一。而此書注二巻第一一。習二何書一乎。

師説。三国志・淮南子等有二此字一。

（『日本紀私記』丁本・一八七頁）[21]

E問。仮名日本紀。何人所レ作哉。又与二此書一先後如何。

師説。元慶説云。為レ読二此書一。私所二注出一也。作人未レ明。

（『日本紀私記』丁本・一九一頁）

右は任意の二項を掲出したに過ぎないが、日本紀講筵では、このように列席者から疑問点や関心事について率直な〈問〉が投げかけられ、それに対して「師」すなわち講師役の博士が〈答〉を返す、というやり取りがしきりに繰り広げられていた。右のD・Eは比較的簡素な、一問一答ともいうべきものであるが、時には、次に見る元慶度の講筵での「溟涬」の訓みをめぐる問答のように、質問者が博士の回答に納得せずに重ねて〈問〉を繰り出し、博士を問い詰めてゆくこともあったようである。[22]

F又問。今前説クラゲナスタユタヒテ之読依二何文一哉。

答。依二古事記一所レ読也。

又問。古事記云。次国稚如二浮脂一而クラゲナスタ、ユヘル之時者。是指二天地初分之後一而発二此言一也。溟涬者天地未レ分之気也。何得レ相二合古事記一哉。可レ謂二前後相違一也。願聞二其説一矣。

答。溟涬者是天地初分之言也。正与二古事記一相合矣。

又問。溟涬含二牙者是春秋緯文也。説者皆謂。是天地未レ分之気也。而依レ何得レ為二陰陽初分一乎。是甚不レ通也。

答。是甚大理也。但先師相伝為二此説一耳。今如レ所レ問。已得二其理一。雖レ然自レ古相伝所レ読也。不レ可二輙改一。

又問。如二今師説一者正与二古事記一相乗也。又先師有下読二此文一為二クゞモリテ一者上也。是暗号二溟涬之義一。然則此文宜レ拠二此説一也。但クラゲナスタゞユフ訓者至二下文洲壌浮漂一而可レ用也。若如レ此者。彼是会合甚得二其理一。如何。

答。承和之代。博士□澄。博士滋相公共定レ読之日。所レ不レ聞二此説一也。今難二以輙改一故也。

（『釈日本紀』巻十六「秘訓一」二一八頁）

「溟涬」を「くらげなすたゆたひて」または「くらげなすただゆひて」と訓むことの根拠を示すように求める質問者に対して、博士（＝善淵愛成）は合理的な〈答〉を返すことができず、次第に〈答〉に窮して、質問者の〈問〉に「理」があることを認め、「先師（＝菅野高年）相伝」の説であるがゆえにただちに改める

ことはできない、と強弁せざるをえなくなり、高年の訓みは「くぐもりて」であったではないか、とすぐさま誤謬を正されて、ついには「博士□澄（＝春澄善縄）」と「博士滋相公（＝滋野貞主）」の権威を借りて高年説を否定するところまで追い込まれてゆく。

日本紀講筵がこのような〈問〉と〈答〉の場であったことは、それになぞらえられた世次の歴史語りが、Fのような激しい議論に発展してゆくことこそなかったものの、重木や侍との間で、同様に〈問〉と〈答〉を交わし合うことによって展開されてゆくものであったことを想起させるであろう。もっとも、『大鏡』の歴史語りの大半は事実上世次の一人語りになっており、その点ではなお不徹底の感も否めないが、早く五十嵐力氏が「文学的に見、また文学史的に見て、『大鏡』の価値興味の中心は、問答体といふ様式を中心としての記述描写にある」（傍点ママ）と指摘していたように[23]、『大鏡』が「問答物語」としての結構を備えていることについては贅言を要すまい。むろん、『大鏡』の歴史語りに見られる〈問〉と〈答〉は日本紀講筵におけるそれのように学問的なものではなく、たとえば、

G（世次）「さても〳〵、うれしう対面したるかな。としごろの袋のくちあけ、ほころびをたち侍りぬる事。さても、このの、しる無量寿院には、いくたびまいりておがみたてまつり給つ」といへば、（重木）「をのれは、大御堂の供養の年の会の日は、『人いみじうはらふべかなり』とき、しかば、試楽といふこと、三日かねてせしめたまひしになん、まいり〔て〕侍し」といへば、……

（「太政大臣道長」〈藤氏物語〉二四二～三頁）

のように、ごく気軽な会話の中で交わされるものも少なくないが、なかには、敦明親王の東宮辞退をめぐる、

H この院（＝小一条院〈敦明親王〉）のかくおぼしたちぬる事、かつは殿下（＝道長）の御報のはやくおはしますにをされたまへる〔なるべし〕。又、おほくは元方の民部卿の霊のつかうまつるなり。

（「左大臣師尹」一〇二頁）

という、道長の強運と元方の怨霊とを主因とする世次の見方に対して、

h それもさるべきなり。このほどの御ことゞもこそ、ことのほかにかはりてはべれ。なにがしはいとくはしくうけ給はることはべる物を。

（「左大臣師尹」一〇二頁）

と侍が異を唱え、敦明親王自身による藤原能信を介した道長への東宮辞退の申し出の顚末について詳しく語る場面も見られる[24]。また、

I（鎌足は）太政大臣になりたまはねど、藤氏のいではじめのやんごとなきによりて、うせさせ給へるのちの御いみな、淡海公と申けり。

（「太政大臣道長」〈藤氏物語〉二二八頁）

という藤原鎌足とその子不比等（「淡海公」）とを混同した世次の発言に対して、重木が、

i 大織冠（＝鎌足）をば、いかでかたんかいこうと申さん。大織冠は、大臣の位にて廿五年、御年五十六にてなんかくれおはしましける。ぬし（＝世次）ののたぶ事も、あまのがはをかきながすやうに侍れど、おり〳〵かゝるひが事のまじりたる。

（「太政大臣道長」〈藤氏物語〉二二八頁）

と誤りを鋭く指摘する一幕もあり[25]、これなどは、博士が質問者に矛盾や誤謬を衝かれる前掲Fの日本紀講筵でのやり取りとも相通じるものを感じさせよう。

叙上のように、『日本紀私記』『釈日本紀』などによって伝えられる、日本紀講筵での講師の博士と列席者との〈問〉と〈答〉の応酬の模様は、『大鏡』の歴史語りにおける世次と重木、侍らとの〈問〉と〈答〉のありようとも重なり合うものであった。世次はみずからを日本紀講筵の博士になぞらえ、歴史語りの聴衆を講筵の列席者たちに見立てて、「おきならがとく事をば、日本紀きくとおぼすばかりぞかし」と述べていたのであろうけれども、それにとどまらず、〈問〉と〈答〉とによって展開されてゆく『大鏡』の歴史語りのあり方そのものが、日本紀講筵に着想を得、それを下敷きとして構想されていたのではないかと思量されるのである。

従来、『大鏡』の問答体あるいは対話様式については、『法華経』や『三教指帰』、『源氏物語』の雨夜の品定めなどに範を取っている可能性が指摘されてきた[26]。そのことはひとまず首肯されるが、本稿は、世次の「日本紀きくとおぼすばかりぞかし」ということばを手がかりとして、世次と重木、侍らとの〈問〉と〈答〉とを基調とする『大鏡』の歴史語りは、日本紀講筵における〈問〉と〈答〉の構図に倣ってもいたのではないか、という見通しを示したものである。

注

(1)『大鏡』の引用は、山岸徳平・太田晶二郎・山田忠雄解説『東松本 大鏡』一～六（貴重古典籍刊行会、一九五三～八一年）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧などを付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとし、底本に補入されている文字は〔 〕で括って示した。引用本文には、東松本を底本とする、松村博司校注『大鏡』（日本古典文学大系）（岩波書店、一九六〇年）の頁数を併記した。

(2) 橘健二・加藤静子校注・訳『大鏡』（新編日本古典文学全集）（小学館、一九九六年）、五八～九頁。

(3) 五十嵐力「問答物語の始祖、大鏡」（『大日本古典の偉容』道統社、一九四二年。初出一九二五年）、松本治久「源氏物語的世界への訣別――大鏡の著作意図（その二）」（『大鏡の構成』桜楓社、一九六九年。初出一九六三年）。以下、単行本所収の論文で初出稿がある場合には、初出年を併記する。

(4)『源氏物語』の引用は、古代学協会・古代学研究所編集／角田文衛・室伏信助監修『大島本 源氏物語』一～一〇（角川書店、一九九六年）に拠り、適宜私に濁点・句読点などを付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとした。引用本文には、大島本を底本とする、柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『源氏物語』一～五（新日本古典文学大系）（岩波書店、一九九三～九七年）の巻数及び頁数を併記した。

(5) 石川徹校注『大鏡』（新潮日本古典集成）（新潮社、一九八九年）、四九頁。

(6) 大石千引『大鏡短観抄』（文化七年〈一八一〇〉）、鈴木弘恭『校正大鏡註釈』上・中・下（青山書房、一八九七年）、佐藤球『大鏡詳解』（明治書院、一九二七年）など、江戸から昭和初期にかけての『大鏡』注釈書のほとんどは、「日本紀」を『日本書紀』の意で解している。六国史の意としたのは、管見の限りでは、関根正直

『大鏡新註』（六合館、一九二六年）あたりが早いようである。

（7）梅村玲美「「日本紀」という名称とその意味――平安時代を中心として――」（『上代文学』九二、上代文学会、二〇〇四年四月）。

（8）山本淳子訳注『紫式部日記　現代語訳付き』〈角川ソフィア文庫〉（角川学芸出版、二〇一〇年）など。

（9）『大鏡』の成立時期については、拙論「予言の中の禎子内親王――呼称と系譜からの視点――」（『物語文学としての大鏡』新典社、二〇〇九年。初出二〇〇五年）の注（4）で私見を提示した。

（10）平安時代語において、「読む」が音読を、「見る」が黙読をそれぞれ表すという使い分けが行われていたことについては、山田俊治「文字文化としての音読と黙読――歴史の重層的な把握をめざして」（河添房江・神田龍身・小嶋菜温子・小林正明・深沢徹・吉井美弥子編『叢書　想像する平安文学』八〈音声と書くこと〉、勉誠出版、二〇〇一年）に詳しい。

（11）関晃「日本紀講筵」（国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』一、吉川弘文館、一九九〇年）。日本紀講筵については、太田晶二郎「上代に於ける日本書紀講究」（『太田晶二郎著作集』三、吉川弘文館、一九九二年。初出一九三九年）、関晃「上代に於ける日本書紀講読の研究」（『関晃著作集』五〈日本古代の政治と文化〉、吉川弘文館、一九九七年。初出一九四二年）に詳しい。なお、日本紀講筵は「日本紀講書」「日本紀講」などとも称されるが、本稿では『国史大辞典』の項目名に従う。

（12）関晃「日本紀講筵」（注（11））。

（13）津田博幸「日本紀講からみた『源氏物語』――仮名で書くことをめぐって――」（『生成する古代文学』森話社、二〇一四年。初出二〇〇五年）は、『源氏物語』は「十世紀中のどこかの時代の話」であり、「光源氏は宮廷の日本紀講で「日本紀」を読んだのだ、と考えるべきだろう」と説いており、示唆に富むが、「日本記などはたゞかたそぼかし」ということばから、光源氏は日本紀講筵に列したことがある、とまで『大鏡』が想到した可能性は低いであろう。

（14）『紫式部日記』の引用は、秋山虔編『黒川本　紫日記　宮内庁書陵部蔵』上・下〈笠間影印叢刊〉（笠間書院、一九七二年）に拠り、適宜私に濁点・句読点・鍵括弧などを付したが、仮名・漢字の表記は底本のままとし、底本にない文字を補った場合は（　）で括って示した。引用本文には、黒川本を底本とする、山本淳子訳注『紫式部日記　現代語訳付き』（注（8））の頁数を併記した。

（15）工藤重矩「紫式部日記の「日本紀をこそ読みたまへけれ」について――本文改訂と日本紀を読むの解釈」（『平安朝文学と儒教の文学観――源氏物語を読む意義を求めて――』笠間書院、二〇一四年。初出二〇〇二年）。

（16）石川徹「光源氏須磨流謫の構想の源泉――日本紀の御局新考――」（『平安時代物語文学論』笠間書院、一九七九年。初出一九六〇年）。

（17）山本淳子「『紫式部日記』消息体の主張――漢詩文素養をめぐって――」（『紫式部日記と王朝貴族社会』和泉書院、二〇一六年。初出二〇〇八年）。

（18）吉井美弥子「女房たちを書きとどめる『紫式部日記』――「女房名」の政治性を超えて――」（桜井宏徳・中西智子・福家俊幸編『藤原彰子の文化圏と文学世界』武蔵野書院、二〇一八年）。

（19）パロディとは「もどき」である、という理解は、故三谷邦明氏のご教示に負う。三谷邦明「パロディ」（『国文学　解釈と教材の研究』四〇―九、学燈社、一九九五年七月）も参照。

（20）藤井貞和「モノガタリの時、場所、モノガタリする行為」（『物語

文学成立史――フルコト・カタリ・モノガタリ――』東京大学出版会、一九八七年）。

（21）『日本紀私記』『釈日本紀』の引用は、黒板勝美編『日本書紀私記釈日本紀　日本逸史』〈新訂増補国史大系〉（吉川弘文館、一九三二年）に拠り、適宜私に濁点を付し、返り点の誤りを訂した。底本は、『日本紀私記』（丁本）は六人部克己蔵本、『釈日本紀』は前田家本。

（22）「冥滓」の訓みをめぐる問答については、津田博幸「聖徳太子と『先代旧事本紀』――日本紀講の〈現場〉から――」（『生成する古代文学』〈注（13）〉。初出一九九九年）に詳しい。

（23）五十嵐力「問答物語の始祖、大鏡」（注（3））。竹内宇生「大鏡の構造――「問答体」について――」（『中古文学論攷』三、早稲田大学大学院中古文学研究会、一九八二年一〇月）も参照。

（24）侍とその語りについては、菊地真「『大鏡』侍語り」（田中隆昭編『日本古代文学と東アジア』勉誠出版、二〇〇四年）、辻和良「侍語り「小一条院東宮退位事件」をめぐって――『大鏡』「批判性」の主題論的理解――」（『文学・語学』二一七、全国大学国語国文学会、二〇一六年一二月）に詳しい。

（25）世次による鎌足と不比等の混同、またそれに対する重木の指摘については、拙論「大宅世次とその語り――〈書かれたもの〉としての語りと語り手――」（『物語文学としての大鏡』〈注（9）〉。初出二〇〇八年）参照。

（26）「対話様式作品」の系譜上に『大鏡』を位置づけた論稿として、阿部泰郎「対話様式作品論序説――『聞持記』をめぐりて――」（『日本文学』三七―六、日本文学協会、一九八八年六月）、同「対話様式作品論再説――〝語り〟を〝書くこと〟をめぐりて――」（『名古屋大学国語国文学』七五、名古屋大学国語国文学会、一九九四年一二月）、同「如是我聞の文学――日本における対話様式の系譜」（小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝編『岩波講座　文学』八〈超越性の文学〉、岩波書店、二〇〇三年）があり、参考になる。

（さくらい　ひろのり／成蹊大学非常勤講師）